

言葉の耳袋 (11)

詩・・聞いた、見た、つくった

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問 教育アドバイザー

張江 幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

【1】身近な詩

日曜日、小六の孫と将棋を指していた。我ながら良い手を指して得意満面。ふと気付いたら鼻歌を歌っていた。

“じいちゃん 筋肉 むっきむき” 劣勢な孫が笑い出した。8月に放送されていた「みんなのうた」から流れてきた歌の一節を、いつしか覚えてしまったのだ。調子やリズムが良いこと、歌詞が面白かったのだ。これが“にいちゃん”とか“とうちゃん”だったら当たり前だ。これが“じいちゃん”ときたから嬉しくなってしまう。それが印象に残ったのだろう。いつしか、私の鼻歌ベストワンになってしまった。童謡・唱歌・歌謡曲・TVCMのうたなどから、きっと皆さんもふと気がついたら歌っていた歌がありますでしょう。

私たちの身の回りには、「詩」とは意識しないで歌っていたり、文字から直接記憶に残っていて口ずさむ詩があるに違いない。

中学校や高校時代には、さかんに詩を暗記し、友人と競い合ったものだ。はじまりの一節はいくつもでてる

からまつの 林を過ぎて	北原白秋
きっぱりと冬がきた	高村光太郎
山のあなたの空遠く	カール・ブッセ
汚れつつあった悲しみに	中原中也

いまの季節になると、不思議に記憶の箱から立ち上がってくる詩がある。

忘れもの 高田敏子

入道雲にのって
夏休みはいってしまった
「サヨナラ」のかわりに
素晴らしい夕立をふりまいて
けさ空はまっさお
木々の葉の一枚一枚が
あたらしい光とあいさつをかわしている
だがキミ! 夏休みよ
もう一度 もどってこないかな
忘れ物をとりにさ

迷い子のセミ

さびしそうな麦わら帽子

それから ぼくの耳に

くっついて離れない波の音

【2】どうして詩をつくるのかな

テーマにそっていろいろな本をあさってみました。

詩人の吉野弘さんは、詩とは「言葉で、新しくとらえられた、対象〔意識と事物〕の一面である」と定義しています。でもよく分かりません。さらにしらべていくと、私が合点したのがありました

詩人であり多くの詩論も書いている嶋岡晨さんが、詩は人生に必要なものであるとした文を書いている。

人がこの世に生まれてくること、それはなまやさしいことではない。さらに、さらに、さまざまな不幸にもめげず、すこやかに生きつづけることは、たいへんむずかしい。

赤ん坊のときのような、新鮮な感覚でその<生きる>喜びを、詩人は追い求めていく。今あるこの世界を、ゆたかなたのしいものにしたいととともに……。

ただ、生きてここにいる、というだけでなく、よりよく自分のいのちを生かす——そこにいろいろな苦しみも、わくだろう。つらい、いやなことも、あるだろう。その障害をのりこえていくためにも、詩は必要だった。なぜなら、詩はけんめいに生きる（いのち）のリズム、歌ごえ、希望やゆめを、伝えるものだから——。

【3】子どもの詩

子どもは感じたこと、びっくりしたことを素直に詩であらわす。むずかしい規制がないから、とっつきやすいのだろう。

川崎洋さんの「子どもの詩」からいくつか紹介しましょう。

(1) おかあさん 藤原悠志 少2

おかあさんは たまに

「きれい?」

ときく

そうきかれたらばくは